

横浜支部例会

- ・日 時 2021年2月21日(日) 16:00~18:00 Zoom
- ・参加者 17名

② 鈴木晶 (高校勤務)

① 3年半前の歴教協大会—五日市憲法テーマあり、昨日五日市の郷土資料館に行ってきた。
なぜ五日市が発展したのか、シルクだったりして横浜への流れがあった。横浜から近代が成り立っている。

② 『旅行ガイドにないアジアを歩く 横浜』出版。歴教協でいろいろ教えてもらった。

なぜこのタイトルか。この本を出している梨の木舎がこのシリーズを出していて、高嶋伸欣さんのマレーシアツアーを出版。私もこのツアーに参加、手伝いしてきた。その流れで横浜があってもいいよねという話になり、ただのガイドブックではなく歴史専門者ではない立場での本もいいねということで出版した。



③ 横浜生まれ横浜育ち。新子安と東神奈川の間で。丘の上から街を見ていた。東神奈川には映画「戦車闘争」のノースドックがあり、朝鮮学校の友達もいた。子どものころからいろんな社会を見ていた。父親も木造船を作っていたので公害で海汚れるのも見えてきた。叔父もフィリピンで戦死。横浜駅で傷痍軍人がお金を乞うている場面も見えてきた。横浜の多面性、矛盾を見てきた。お年玉で一人旅に親が行かせてくれた。80年代ごろ高度成長後の社会もみてきた。大学では都市問題都市計画を考えてきた。

鶴見区の定時制高校に勤務した時、学校に揃っていた横浜空襲の本を読んで戦争のことを知った。沖縄ルーツの生徒も多くいた。1980年代ごろから南米からの生徒も来て、鶴見にはいろんな生徒がいた。

国内旅行すると、どこにも大体資料館があり、そこには出征兵士のことなどが展示されていたので戦争を体感できた。しかし加害のことについてはまだまだだった。

④ 定時制高校だったので生徒が来ないこともよくあるので学級通信を出したり、組合の青年部でニュースを出したりして、発信力の大きさを知った。

1993年高嶋さんが教科書裁判を始めたので、そこでニュース担当者になった。また、歴教協で学びそこで出会った石井さん、蓮沼さん、吉池さん、大里さん、高木さん、などから学んだ。世話人会の後の飲み会で聞いた話も出版した本のもとにはなっている。また、アジアフォーラムや平和のための戦争展横浜、組合などで学んで発信してきた。高嶋ツアーへの参加もとても有意義だった。

- ⑤ フィールドワークで黄金町をよく歩き、石や石碑の話聞き、戦争の痕跡があるなら生徒たちに歴史



を知識だけでなく、想像を膨らませてもらえると思い、いろいろ回った。

写真—(パワーポイント資料)—東神奈川近くの空襲被害の木や石。

お寺や神社をめぐり、石碑や歴史について見てきた。

それらを紹介したいと思ったことが本の出版につながった。しかし、昨今の出版状況を鑑みて、いろんなところに想像力を巡らせてもらいたかったので、そのことだけではないものにした。

横浜は注目を浴びていたので、「学んで見つけて、伝える」ことをして社会科教員としてやってきた。

- ⑥ 90年代は定時制だったので、厚木基地の夜間飛行訓練を見に行ったり、沖縄の県人会に行ったりし、いろんな方に文化祭で来てもらった。
- ⑦ Y校ではグローバルラーニングをやっていた。英語だけでは学びきれないのでフィールドワークで外に連れ出し、部活「GLOCAL-Y(グローカリー)」を9年間やり、社会構造を見てきた。
Y校は創立130年以上の学校なので、横浜で10人集まればY校関係者などに必ず出会えるということもあった。
- ⑧ 横浜 YSFH でGS(総合学習)を担当。
今は東高校ユネスコスクールでの課題研究をしている。また、大学院にも仕事しながら2年間通った。フェリス女学院大学なので、最終学歴は女子大だ。
- ⑨ いろんな人と出会い、新聞でも取り上げてくれた。
「日々の暮らしの中で歴史あり、想像力や批判力ができる云々」

⑩本『横浜』制作の意図

学問の理論と実践—百聞は一見に如かずではないが、実際にモノを見ていくのが大事。

「書を捨て旅に出よう」と寺山修二の言葉にある。

横浜にはいろんなものがいっぱいある。近現代史を軸に一社会的暴力-公害や民族問題などが周りにあり、見据えていきたいと思った。

平和教育も意識してきた。こういう看板があるからいいだろうとか、言うのはダメ、きちんと足元を見るべき。社会科は苦手という生徒たち多いが社会科は面白いと思ってもらいたかった。もちろん暗記すべ

きこともあるが。今、歴史修正主義があり、ひどい本が書店に並んでいるので、状況を少しでも良くしたかった。

いろんなことが大事だが、社会の構造や仕組みを横浜を通して理解してほしいと思った。怒りやおかしいという違和感を生かさないうまま終わらせたくなかった。こういうところに目を向ける生徒の感性を大事にしたかった。

與那覇潤さんの「個別の事象の背景にあるマクロな学問的な営みが研究者には大事」で、教員もそれを担っている。構造や仕組みをちゃんとみられる力をつけてほしい。

平和教育は戦争の構造をちゃんとつかむことが大事。

3 質疑応答

T：私も横浜の育ち。ずっと緑区在住。中区や鶴見区のこと知らず育った。横浜は明るい国際都市というイメージだった。実は横浜には歴史上のことがいろいろある。生徒はどう感じたか？

鈴木：なるべくマイナーなところではなく観光地、学校の周り、横浜の中心部に行くようにした。観光地にもいろいろあるんだよと、新鮮な驚きをもってもらう仕掛けがあった。

山下公園や氷川丸にも歴史や命がかかっていると。どんどんと面白がってくれた。

K：卒論も横浜で書きたい。だから本に興味。石出授業で言われたフィールドワークに興味あった。自分はやったことなかったが、どれくらい学校の外に出ることができるものなのか？(A)

O：構造—大事。フィールドワークに行ったとき、ここという一番の見どころあったら紹介してほしい。(B) 時代区分をしているのはガイドブックでは珍しい。どこで区切ろうと考えたのか？(C)

S：(A) フィールドワークでは、生徒の安全面などは慎重にやった。届け出は早めに（管理職への届け出）、周りの教員にも。状況を作っていくのは大事。制服で行くから周囲への迷惑についても考える。昼食も必要だから安いところ捜しなども楽しくなる。Y 校関係者—知らない人—などとの話は予定外の話もできてプラスになる。見てああよかったで終わらないこと。短くてもコメント書いてもらい、ニュースや冊子にしたりする。研究成果としては発表しなかった。ほどほどにまとめてきた。今もそうだ。

(B) 象徴的なのは氷川丸かな。船会社、戦争、戦後の歩みがわかる。2 番目は中華街。

(C) 章立ては、普通ならエリアごとだが、歴史の順番とその流れ構造の意味を考えてもらいたいから時代ごとにした。パラパラめくって写真を見てもらい、本文を見てもらっても時代をつかんでもらえる。

O：鈴木フィールドワークは部活と総合学習がらみだったが、普通の授業では？(A)

鈴木：(A) 普通の社会科授業でカリキュラム的にやるのは難しい。総合学習に取り入れられるといいなと思う。

Y：(旅行会社・横浜生まれとして) すごくこの本を読んでいると大震災の人の朝鮮人虐殺などに細かく触れられていてこれでFW やったらいと思った。

この章立てではどのあたりに多く連れて行っているか。(D)

鈴木：(D) 生徒は戦争とか関東大震災とかに関心や問題意識を持っている。表に出して会話することがない。雑談すらセーブしてしましてや政治的なことは…。人権侵害についてそのままいられるわけないのだが、いうことを自主規制していくと思う。生徒や教員に問題意識をもってもらいたいと思ってい

る。人の在り方の部分には関心持ってくれている。

「横浜メリーさん」のことを知っている人は多い。Y校は女子生徒が多かったので、メリーさんへの関心は高かった。

E：埼玉出身なので、横浜ときくと怖いというイメージだった。知らないこと多く本を読んで知りたかった。埼玉についても知らないこと多いと思った。いろんなところでこういう本が出るといいと思った。

N：歴史と今の自分を重ねて考えてほしいと企画している。今も埼玉に住んでいる。企画の発端が平和について考えたり、学んだりするところが埼玉にはないということだった。自分も埼玉について知らなかった。つい最近丸木美術館について知り、自分の地域について知らなければと思った。フィールドワークの中で学んだことを共有する工夫や時間は？（E）

鈴木：(E)最後に感想を言い合ったり、少しいいからコメント書いてもらったりというのは地味だけど大事。学びあいに後日生かしたりできる。いろんな地元でこのような本ができるといい。

しめつけや気にする人がいるから、本などを通して話題にできるといい。今の教育現場に穴をあける意味合いもこの本の意図ではある。

O：埼玉でも関東大震災での虐殺有り、ホロコーストとつながる。バトンを受け継ぐために本がある。西山さんの企画もそうだ。

4 TM 「世界史の授業で感染症を取り上げて」

公立高校勤務。横浜生まれ。2校目から横浜離れ、3校目は横須賀の高校、4校目は茅ヶ崎の高校。どちらかという三浦半島が主だ。授業の初めに三浦半島などの歴史について話すが、横須賀市の子どもですら横須賀市の歴史知らない。専門の世界史Bは19年間やってなかったので、今年久しぶりに本格的に担当。

「世界史探求」は選択授業だから教科書を見捨ててやっている。世界史Bの時は教科書を使用する。世界史Aでやった帝国主義の後を学習する。昨年は6月から授業開始。その前はコロナで自宅学習だった。内容—1 学期は帝国主義時代。

プリント(3)の左側は年表。今の「コロナ」の時代に感染症の授業をやらないのはおかしいと思い実行。マンガ本『リウーを待ちながら』を読み感染症との付き合い方を歴史を通して考えてもらいたいと計画。感染症の授業はほとんど思い付きでのプリント作りだった。

19世紀の帝国主義時代の医学の進歩が植民地化につながっていったということを考えさせたかった。

朱戸(あかと)アオのマンガ本『リウーを待ちながら』では、自衛隊がペスト菌を拾ってきてしまい、市がパンデミックになり封鎖したが、感染拡大はとまらず、横走市の人間というだけで差別受ける話。

今のコロナ禍で起こっている感染者や医療従事者への差別偏見と類似。

歴史と現代をどうつなげるかを考えさせたかった。

実は私たちは感染症をこの100年間で克服したと思っていたが、実はそばにあった。という問題を生徒に考えてほしかった。最初はいろんな感染症と私たちの付き合いを話した。次はスペイン風邪によるパンデミックなど、感染症と人類の付き合い方、その途中での帝国主義下での感染症など。

順番がランダムの授業だった。生徒の反応はレジュメにあるので見てほしい。この授業のことについて書いた生徒の例。今のコロナの事も出てきて、この授業を受けてよかったというのもあり。感染症の授業

はよかったのかなと自画自賛。

⑥ 質疑応答

O：プリントの順番 No.1～ 順番がうまくいかなかったということだったが…。

F：歴史総合になっている。日本の話は出てこないのか？北里柴三郎とか、19世紀は移民の時代でもあり、ダイナミックな世界史的動きがあるので生徒も食いついたのではないかと思う。奈良の大仏建立は感染症による、とか。感染症が身近な問題だったのでそれとの関連で。(A)

TM：(A) 最初コレラ（コロリ）で入ってきたのかな。日本史の授業で出てこないことは取り上げた。北里とか野口英世、志賀直哉は織り込んだ。(野口はスルーしたが)日本史はあまり頑張らなかった。週2時間の自由選択科目なので、ある程度世界史に関心あるのかなと思っていた。日本史との関わりはあまり考えなかった。グローバルな人の流れとしては、スペインインフルのところで少し取り上げた程度。授業時間が少なく、途中で体育祭文化祭が入り、うまく流れず授業カットが多かった。

S：(B) 時代の中で医学の進歩がいいことだけではなく問題有り、帝国主義の問題性とを重ねたか？

TM：(B) 1 学期の帝国主義の授業で、様々なイノベーションを生徒に調べさせた。一気に革新が進んだ時代で、現在私たちに必要なインフラが作られ、その中で医学もその一つだったと捉えた。しかし、植民地の人々にはどうだったのか、帝国主義と医学の進歩、医学の進歩と植民地化と三重の話はした。

O：6月の例会でスペイン風邪のときパレードで一気に広がったことを「あなたがジャーナリストだったらどう報道しますか」という問いかけをした授業委報告を丸山勇太さんがした。

今回の報告は植民地の問題医学に内在する知の問題などいろいろ考えさせることがある。

Y：19年ぶりの世界史担当に驚いた。資料を作るのにどのくらい時間がかかったか。最終的に授業のまとめをどうしたのか？(C)

TM：(C) 授業の準備は、日曜日の夕方プリントのプランを作り始め月曜日までに作成。授業や部活動しながら。最終ゴールだと思っていたのはNo15-付属資料で、コロナをどう考えるか。三重県知のいじめはいけないというメッセージを読ませて、感染症を克服したはずなのにできていなかったということについて書かせた。コロナ以後のことは授業ではやっていない。みんなで考えようねというスタンス。

M：教科書に関連するかわからないが、他の先生がどういうふうに受け止めているのか。生徒の食いつき(文字がいっぱいあったし)はどうだったか。(D)

TM：(D) 単独の講座なので、他の先生との相談はしていない。隣の日本史の先生と話していると面白いねと反応はしてくれたが。若い先生にプリント渡して話したかったが忙しくて無理だった。後日やりたい。はっきり授業を受けた感想を述べたのは一人だけだった。

F：マンガで生徒に問いかけたいと思っただろう人権問題について知りたい。わがこととして生徒になっていないのではないかと。感染症はいろんなネタあるが、生徒は消化不良するだろうことは予想される。100年の間に我々が忘れてしまったことを強調したかった。

『進撃の巨人』(諫山創)というマンガの初回の終わりが、巨人が感染症だったのではないかと映像で投げかけた。アメリカのインディアンがキリスト教になったのは、我々の宗教では感染症に打ち勝てなかったということがあったからという説も。

○

：水俣病も最初は「伝染病」と考えられていた。今の得体の知れないものをわかりやすくしたい。それが差別につながっていく。本当はどこにでもある環境に人間はいる。それをわからないで特定の人や場所にあてはめると差別する権力構造にあった。構造—戦争の記述は教科書にあるが、忘れやすい。構造に気づかせてくれたのが「コロナ」。他の人たちの行動を考えたりできた。

E：ハンセン病の問題にかかわらず、コロナ禍など一定期間隔離が必要。ワクチンがないものへの対応としては仕方ないが、ハンセン病問題から学ばなければならない。

感染症は誰でもかかる可能性がある。だから誰にでも起こりうるし、誰でも加害者になる。

『歴史地理教育』1月号—横浜の大きな墓地で写真を撮ってきた。歴史的な史跡は各地に残っているから身近な問題としてとらえなおしたり、人権問題として被害者かにも加害者にも考えたりしないと、また過ちを繰り返すのではないか。

K：生徒の感想からみると自分事として考えている。そういう授業をしたい。世界史をとったことがない。日本史専攻なので。世界史の60年というスパンはざらなのか。日本史では60年は大きい。

(E)

TM：年表はばらしているの、国ごとにしているの、スパンは長いが生徒がやっている内容としては短い。日本史とのつながりを調べさせた。

O：コロナ1年たって生徒たちは疲れてきている。気づきを言葉や学問にあてはめていくのは学校の授業でこそできることだ。

7 例会後にいただいた感想

◎鈴木さん、TMさんともにベテランならではの実践報告だと思いました。TMさんの報告は資料が多く提示されていたので、全体像がつかみやすかったです。人類と感染症との戦いが長い歴史をもっていること、特に近代以降の感染症は世界の一体化やグローバル化が背景にあることがコンパクトに指摘されていました。鈴木さんの実践は、報告時間が短く中途半端であったことが残念でした。やはり実際の事例をいくつかお聞きしたかったです。個々の歴史事象を通して、歴史の構造の問題に生徒の認識を到達させたいというねらいは大変共感しました。私も高校3年選択講座「まちづくりを考える」で地域の構造に考察が及びように、東京・横浜・川崎の都市の歴史を扱っています。鈴木さんの本や今後企画されるであろうフィールドワークから学んでいきたいと思います。(Oさん)

◎本日は例会に初参加させていただき有難うございました。熱心な先生方、また教師を目指す学生さん達にもお会いでき、とても清々しい気持ちでした。日本の教育も捨てたものではないですね(失礼します!)。こういう先生たちの授業ならば、また受けたいなあと感じてしまいました。(Kさん)

◎本日の例会では、授業実践の報告などを聞くことができ、貴重な時間でした。ありがとうございました。フィールドワークなどを通じて、社会の仕組みや地域史などを生徒に教え、社会科は暗記科目ではないと伝えることが大切だと思いました。感染症と歴史を関連付けた授業を行うことで、コロナの流行について改めて考えることができ、誤った認識からの差別も無くなると思いました。学校周辺の地域の歴史を扱った授業で、その地域の地震の記録や、言い伝えを取り上げても良いと考えます。歴史学習を通じて、地震の記憶の風化を防ぎ、防災教育につながると考えます。(Aさん)

◎鈴木様へ

横浜についてはどこか遠く感じてしまっている自分がいながらも、自分にとって近すぎる場所こそを大切に歴史に向き合いフィールドワークを行い、本も書かれているその姿勢から学ぶことが多くありました。本はぜひ読ませていただきます。私も自分の育ってきた環境はどんな歴史を背負っているのかということについて調べてみようと思いました。もしかすると深い意味を込めた言葉ではなかったのかもしれませんが、「発信することで学ぶ、学ぶからこそ発信したくなる」という言葉が印象的でした。ありがとうございました。

TM 様へ

ご丁寧な資料を配布した上で説明してくださりわかりやすかったです。あの場で何か話したいなと思いつつ自分の考えがうまくまとまらず発言できなかったのですが、私は半年ほど前に「ペストの記憶」を読み、何かもやもやしました。それは、歴史から人間が学べていないことを感じたこともそうなのですが、それはわかっているもいざ今を生きている自分は何を思い行動しているかと考えてみるとなんだか歴史から学んでいると自信を持って言うてはいけないような気がしたからだと思います。本ご紹介いただいた漫画や本はぜひ読んでみようと思うのですが、生徒さんたちはそのような資料を読んだ時、どのように受け止め、考えたのか気になるなと思っています。本日はありがとうございました。

(Ni さん)

◎鈴木さんの報告—自分が育ち、また生活してきたり現在暮らしているところをしっかりと歩き、見直し、学び、伝えるということの素晴らしさを実感しました。私も自分の身近な地域のこと(歴史や自然環境、その他の状態?)をもっときちんと知りたいし、知らなければと思っているのですが、それができていません。鈴木さんのこの本を読んで、歴史をおった章立てによって、歴史の中での地域が見えてきて、現在暮らしている横浜の地をもっと歩きたいし知りたいと思いました。(実は 2015 年に退職するまでは横浜はあまり好きなどころではありませんでした。生まれ育った横須賀大好き人間でした。)また、地域を知るという点では、小宮まゆみさんが編集に関わって昨年末に発行された『親子で読むふるさと 港南区の歴史』(港南歴史協議会編・著)も面白いです。(Na さん)

◎鈴木先生の報告では、フィールドワークの意義や面白さについて考えることができました。私自身も横浜市民として 21 年間生きてきて、さまざまな場面でよく知っている(はずの・つもりの)横浜のまちや歴史について新たな発見や気づきがあり、その度に驚かされるという経験を何度もしてきました。『旅行ガイドにないアジアを歩く 横浜』は、そのような経験を重ねることができるような記事が多くありそうで、早く手に取りたい気持ちになりました。また、秋頃に予定されているツアーもとても楽しみです。

TM 先生の報告では、コロナ禍にあって感染症と結びつけた世界史の授業という素晴らしい授業実践を聞くことができました。さまざまな場所で「日本史の中の感染症」という実践は聞いていたのですが、世界史の中の実践は今回初めて聞いたので、とても興味深く思いました。生徒が授業をどのように受け止めたのか、さらに教員がそれをどう受け止めたのかというようなことを聞くことができ、よかったです。(K さん)

◎鈴木晶先生の本を書かれた経緯を伺い、とても読んでみたくなりました。授業実践として、フィールドワークをされている点も、大変驚きました。フィールドワークは、地理の授業などを思い浮かべたのですが、歴史の授業でもフィールドワークができる点を、むしろ、歴史の授業だからこそ、フィールドワークが有効なのだ、と、学ぶことができました。コロナ禍での制限はありますが、私もいろんなところを散策したいと思いました。そして、教員になった際は、是非、フィールドワークを取り入れたいと考えました。周りの先生方や、管理職の先生方に早めに報告するなど、フィールドワークを行う際の注意点も、鈴木先生が教えてくださったので、とても参考になりました。ありがとうございました。

TM先生のご報告は、まさか、19年ぶりに世界史Bを担当されているとは思わず、驚きました。「感染症と歴史」というテーマは、正に現代と歴史を結びつけるよいテーマだと感じました。しかし、限られた授業時間でどこまで迫れるのか、また、どこまで深く掘り下げるのかが、難しいと思いました。最後の質問で、授業準備のお時間や、授業のまとめをどうされたかを、ご丁寧々に答えてくださり、ありがとうございました。授業づくりの参考になります。ありがとうございました。(Yさん)

次回予定 北川直実さん「戦後75年『若者から若者への手紙 1945←2015』プロジェクトに取り組んで」

2015年の戦後70年での取り組みからはじまり、戦後75年の手紙プロジェクトに繋がっています。今回、横国大英語の授業でも使用、戦争体験を現代にどう生かすか考えたいと思います。ぜひ、事前に本を手にとっていただくと、イメージができるかと思います。

■『若者から若者への手紙 1945←2015』

(写真/落合由利子、聞き書き/室田元美・北川直実、ころから、2015年)

<http://korocolor.com/book/letter1945.html>

■日時 2021年4月17日(土)

報告者 北川直実さん

■ご本人からの紹介

編集者であって教員ではない。1冊の本からいろんなアイデアが出てきた、10代20代の若者から。山田さん西山さんのように意識高い人にも参加してもらい、若い人の思いを伝えたい。

*6月は大会予備報告会にしたいので、希望者を募集しています！